

ZOCALO 2025 1 ▶ 3

ZOCALO=ソカロはメキシコの都市の広場を意味するスペイン語。埼玉県立近代美術館はアートを通して交流する市民の広場をめざしています。

あの頃、みんなメキシコに憧れた

企画展「メキシコへのまなざし」
2025年2月1日(土)～5月11日(日)



●1955年「メキシコ美術展」

今からおよそ70年前の1955年9月、東京国立博物館で「メキシコ美術展」が開幕しました。この展覧会にはマヤ、アステカ文明の遺物からメキシコの現代美術、民芸品まで1,000点以上が出品され、ある国の美術が古代から現代までまとめて日本にやってきた初めての展覧会といわれています。現代美術部門には「メキシコ壁画運動」を牽引したディエゴ・リベラ、ホセ・クレメンテ・オロスコ、ダビッド・アルファロ＝シケイロスや、次世代を代表するルフィーノ・タマヨなどの作品が展示されました。

1950年代、メキシコ美術は次第に注目を集め、なかでもこの展覧会は美術家たちに衝撃を与えました。戦後の日本では、直面する政治や社会の問題を、リアリズムを通じて描き出す作品が多く発表されていました。こうした傾向を模索する美術家にとって、メキシコ革命を背景に、社会的な主題を土着的な要素を加味しながら躍動感のあるリアリズムで表現するメキシコ美術は、示唆に富むものだったのです。

ところで、当館は開館当初からメキシコ美術を収集してきました。この収集方針には、メキシコ美術に造詣が深かった初代館長・本間正義の意向が現れています。なぜ本間はメキシコに惹かれたのでしょうか。その出発点に1955年の「メキシコ美術展」があるといます。

企画展「メキシコへのまなざし」では、1950年代にメキシコに魅了された福沢一郎、岡本太郎、利根山光人、芥川(間所)紗織、河原温の作品や資料を紹介し、彼ら彼女らがメキシコ美術をどのように捉えたのかを考えていきます。さらに同時代を生きた本間の仕事にも目を向け、当館のメキシコ美術コレクションの源をたどります。



●美術家たちのメキシコ —利根山光人の場合

利根山光人(1921-1994)は、「メキシコ美術展」に影響を受けて渡墨した美術家のひとりです。利根山は、第二次世界

界大戦の傷跡がまだ残る東京で画家の道を歩みはじめました。1954年、岩波映画製作所による記録映画『佐久間ダム』を見たことをきっかけに、佐久間ダム(静岡県浜松市)の工事現場で労働者と寝食をともにする生活をはじめ、その体験をもとにした作品制作に挑みます。加えて、利根山にとって転機となったのが、翌年の「メキシコ美術展」でした。彼は展示を通じて、メキシコ美術のヴァイタリティーや土着性に刺激を受けたといいます。社会的な問題やその中で生きる人間の営みを捉えようとした利根山は、創作の手がかりをメキシコ壁画運動に見出したのでしょうか。

1959年、実際にその風土を体感すべく、メキシコに向けて出発しました。

利根山はしかし、メキシコに渡ると壁画運動よりもマヤ文明の遺跡に夢中になります。彼はマヤの死生観や精緻な暦などに豊饒な想像力を感じ取り、自身の制作にもそれを反映させていきました。《いしぶみ》は、雨と雷を司るマヤの神「チャック」をモチーフにしています。ぎょろりとした目玉と古代遺跡を思わせる明快なかたちが暗闇に配されており、呪術的でありながら、どこかユーモアも感じられます。また利根山は作品制作にとどまらず、マヤの遺跡の拓本採集やメキシコ民芸品の蒐集にも力を注ぎました。メキシコとの出会いは、利根山の生涯を決定づけたといえます。



●本間正義とメキシコ美術コレクション

一方、1955年の「メキシコ美術展」を美術館の学芸員として観覧した人がいました。当館の初代館長を務めた本間正義(1916-2001)です。大学で美術史を専攻した本間は、1953年に国立近代美術館(現・東京国立近代美術館)に就職します。そして「メキシコ美術展」に感銘を受け、1962年には仕事でメキシコを訪れる機会を得ました。この頃メキシコでは、社会的な主題を描く壁画運動に代わって、特定のイデオロギーから距離を置き、普遍性を重んじる絵画が盛んになりつつありました。本間はその先駆者であるルフィーノ・タマヨや、より若い世代の美術家と親交を深めます。1962年の滞在はやがて「現代メキシコ美術展」(1974年、東京国立近代美術館)に結実しました。タマヨ以降の世代を紹介したこの展覧会で、本間は「メキシコといえば壁画運動」という認識をアップデートし、メキシコ美術の現在地を日本に伝えることを試みたのです。

1982年、当館の開館とともに本間は初代館長に就任しました。埼玉県とメキシコ州との姉妹提携締結(1979年)もあり、当館はタマヨの版画作品を開館準備室の時代に収集し、1985年には企画展「メキシコの美術—革命と情熱—」を開催します。こうした活動は、メキシコの美術動向にまなざしを注いできた本間が主体的にかかわったからこそ実現したといえるでしょう。

この広報紙『ZOCALO』(ソカロ、メキシコの都市の中心となる広場を意味するスペイン語)の名付け親は本間正義、創刊号に文章を寄せたのが利根山光人です。(Y.T.)



① 岡本太郎《建設》1956年 油彩・カンヴァス 川崎市岡本太郎美術館蔵 ② 福沢一郎《埋葬》1957年 油彩・カンヴァス 東京国立近代美術館蔵 ③ 芥川(間所)紗織《民話より》1954年 染料・綿布 豊橋市美術館蔵 ④ 河原温《20 ABR. 68》1968年 リキテックス・カンヴァス 名古屋市美術館蔵 ⑤ One Million Years Foundation ⑥ ホセ・クレメンテ・オロスコ《示威行動》1935年 リトグラフ・紙 名古屋市美術館蔵 展示期間:2月1日～3月23日 ⑦ 利根山光人《いしぶみ》1961年 油彩・カンヴァス 東京国立近代美術館蔵 ⑧ 一般社団法人アルテネヤマ ⑨ 利根山光人による拓本《太陽の神殿》(マヤ、パレンク遺跡)1963年 墨・和紙 世田谷美術館蔵 ⑩ 一般社団法人アルテネヤマ ⑪ ルフィーノ・タマヨ《黒い背景の人物》1976年 版画の混合技法(エッチングほか)・紙 埼玉県立近代美術館蔵 ⑫ 2024 Rufino Tamayo / ARS, New York / JASPAR, Tokyo X0357

松平莉奈 コードとモード

アーティスト・プロジェクト#2.08 松平莉奈
2025年2月1日(土)～5月11日(日)

現在活躍中の作家を紹介する企画、「アーティスト・プロジェクト#2.0」。今回は、関西を拠点に活動する松平莉奈(1989-)を迎えます。



① 《一休森女伝》紙本着色 2014年 天祐寺蔵(※参考図版)



② 《笑顔のリノ利兵衛》紙本着色 2023年(※参考図版)

今回は、「コードとモード」と題し、過去から現在の「画家」という存在に焦点を当てて、創作行為をテーマに展示を構成します。内容について作家に話を伺いました。

アーティスト・プロジェクトをきっかけに、埼玉の歴史や、ゆかりの作家を調べるうちに知った、南画家・奥原晴湖(1837-1913)に関心を抱いています。晴湖は30代で中国の文人、鄭板橋(ていはんきょう)に私淑し、その後も徐渭(じょゐ)や陳淳(ちんじゅん)といった過去の書画家たちの作品を研究し、晩年には独自の境地に至っています。晴湖の興味深い点は、時流を読みながら学ぶべき対象を定め、自己の画風の発展に活かしていることです。ただ描きたいものを描くために学ぶ、それ以上のことはあえて求めない潔さすら感じます。

作品を生み出そうという行為は、常に「学び」と「自己の再構築」の繰り返しです。「コード(code)」は、絵の伝統的な技法や規範、先人たちから受け継がれる学びのプロセス。一方「モード(mode)」は、その学びを基にして自己流のスタイルや新しい表現を生み出す過程を意味しています。

先人の手つきに自己を没頭させ、自らをむなしくする時間、それは「自己流」の形成において無くてはならない過程です。晴湖の学びに倣い、彼女が影響を受けた画家の模写を通じ、プロセスの中から生まれる「自己流」を発見する試みをできればと思っています。

本展では、中国漢時代の画家、毛延寿を描いた《王昭君説話より 画室の毛延寿》(③)や、「鶴(ぬえ)派」と揶揄された竹内栖鳳の画風に着想を得た《鶴の解体》(④)ほか、先人の絵のオマージュやサンプリングをテーマにした作品を出品予定です。そして、晴湖の研究を経て、新作も構想中です。どうぞお楽しみに!(K.M.)



③ 《王昭君説話より 画室の毛延寿》紙本着色 2019年



④ 《鶴の解体》紙本着色 2017年 ユアサエジシ氏蔵 撮影:乃村拓郎

松平 莉奈 (まつだいら りな)
1989年兵庫県出身。2014年に京都市立芸術大学大学院美術研究科日本画専攻を修了。主な展覧会に、2024年個展「天使・花輪・ケンタウロス」高島屋(京都店・横浜店・日本橋店)、個展「開発の再開 vol.4 松平莉奈 3つの絵手本・10歳の欲」gallery αM(東京都)、2023年「日本画の棲み家」泉屋博古館東京、個展「蚕」KAHO GALLERY(京都府)など。